

交通 評論



富士山の世界文化遺産登録が決まって、NPO富士山測候所を活用する会の事務局は、急に忙しくなっ

た。いろいろな取材を受けたり、問い合わせがあったりする。気象庁から回ってくる質問もあるので、どうやら我がNPOが山頂の一角で細々と続けている活動も市民権を得ているようである。

そのことはありがたいのだが、実は、今年で7年目を迎えるNPOによる測候所の研究目的の開放利用に、赤信号がともっている。目下のところ、三井物産環境基金のおかげで何とか、今年の夏の2か月の維持管理までは可能であるが、来年以降の目的が立っていない。

気象庁から測候所の施設

の一部を借用して行っている研究活動は思いのほかの成果を挙げており、若い学生の学会賞受賞などにつながっているが、維持管理のための資金は心もとない。

成果の一例をあげると、先月、郡山で行われた日本放射線安全管理学会で、NPOの若手研究者の鴨川仁

・東京学芸大 学助教が「福島原発の影響は富士山で見られたか」というポスター発表を行った。

原発事故後、測定したデータや報告されたものから、大気放射能と空間線量などに関連するものを集められるだけ集めて、鉛直方向の分布を報告したものが、珍しい「鉛直方向の実測データ」として注目を集めた。

2011年(平成23年)

世界遺産効果

土器屋 由紀子

3月の事故当時、富士山頂の測候所には誰も滞在を許されていなかったが、山麓1300mの太郎坊で早稲田大学・大河内博教授のグループは降水やエアロゾルに含まれる化学成分濃度の通年観測を行っていた。このサンプルの放射能測定から3月23日ごろ、原発から放射性プルームが飛んで

高1300mではセシウム134が検出されたが3400mでは検出されなかった。これらのデータについて永淵修・滋賀県立大教授による気象解析法を使って、富士山に到達した放射性セシウムは標高2500m以下を通過してそれ以上高いところへは行かなかったのではないかと結論したのが鴨川さんの報告である。

きたことが明らかになった。

山頂の測候所の開所直前の6月末に採取した雪の断面試料(深さごとに汚染の履歴がわかる)の放射能は検出限界以下だった。当時・放医研の研究者だった保田浩志・IAEA職員が7月はじめに登山しながら測定した登山道の放射能は標

データは非常に少ないので、輸送のモデル計算などの検証の役に立ち、モデルの改良に役立つことを期待する。

震災直後、とても富士山の観測どころではないのではないかとこの意見もあったが、こういう時だからこそ観測を続けたいという研究者の熱意で観測を続けて

きてよかったと思う。日本の一番高い場所が観測の場として維持されていることは意義深い。これからも続けなければならぬのではないか。資金難にあえぎながら、それでも少しずつ支持者を増やしてこまめ来たといえる。

本当にやりたい研究は、先駆者・野中至の時代のよろに自腹を切つて無理してもやるしかないのだろうか。現に、自腹を切つて付き合っている若い研究者たちがいつまで持ちこたえられるのか心配である。

世界遺産効果で何か良い話が来ないかと思いがながら、今年の夏の観測の準備をはじめている。経費削減のために御殿場のアパートはボランティアの研究者でつなぐなどの、ぎりぎりの条件であるが、8月末に無事終了するまで事務局を含めた裏方には緊張した日々がはじまる。

(江戸川大学名誉教授)